

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本近代文学史
Author(s)	ヘルニワティ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1996 : 93 - 100
Issue Date	1997-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039400">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039400</a>
Right	
Relation	



# 日本近代文学史

ヘルニワティ

## はじめに

明治の新政治が誕生した元年（1868年）から現在までを近代と一般では言われている。なぜなら、1868年という年は、日本にとって大きな転換点に当たる明治維新の行われた年でもあったからだ。これを境に日本は武士階級を中心とした江戸時代と呼ばれる封建社会から、近代的な社会に急速に変化していくことになる。特に、1868年から1912年まで、40数年にわたる明治時代において様々な分野で急激な近代化が進められ、近代的国家体制や市民社会もこの時期において形成されたのである。つまり、当時の日本にとって重要なことは、国家の体制の近代化が国民全体の方針になったということだったのである。

ところで、日本文学が近代的な性格を持つようになったのも、このころからである。明治前期ごろから、国民の政治参与の権利を主張する、自由民権運動がさかんになった。その思想を人々に伝える目的で書かれた一連の小説などが出ていたが、本当の意味で近代の文学とは言えないものばかりであった。坪内逍遙は「小説神髓」という評論を書き、西洋小説と同じようにリアリズム小説を主張した。その影響を受けた二葉亭四迷は、明治20年（1887年）に『浮雲』という小説を発表し、日本の近代リアリズムの先駆者となった。言文一致運動の実践者の一人としてすぐれた行跡を残した彼はロシア文学翻訳作品をもって文学界に大きな影響を与えた。『浮雲』という小説は、ある内気な青年が同居している娘に恋をする物語であり、社会の急激な変化に耐えられない青年の苦悩を大変細かく描くことにより、日本近代小説の最初の作品として位置づけられている。

二葉亭四迷の『浮雲』の主人公達が直面した近代的な諸矛盾は島崎藤村や田山花袋らの自然主義文学を生み出した。現実をありのままに描き出す自然主義文学は、社会的な諸矛盾との対決を回避する方向に進み、やがて日本の独特の私小説の系譜へと受け継がれていくことになる。しかも、小説だけではなく、詩も自然主義の影響を受けた。その結果、解放的な口語自由詩のスタイルが確立され、近代詩の基盤が完成されたのである。しかし、夏目漱石と森鷗外はいずれも鋭い文明批判精神をもち、と同時に自然主義文学に否定の態度をみせている。

またこの時期では、自然主義とは対照的な文学世界を追求した、永井荷風、谷崎潤一郎によって完成された耽美派文学も花開いている。そして大正時代になると、耽美派や白樺派が見過ごしてきた現実をもう一度とらえ直そうとする傾向が強くなる。理想主義的なヒューマニズムと強烈な自我肯定を特色とする作品内容、および文語性を完全に切り落とした自由平明な文体とによって、文壇の主流としての位置を獲得した。近代文学の中でも私小説は大きな特徴をもつものとなっている。そして、夏目漱石と森鷗外は今日に至るまで文学にとどまらず様々な影響を与え続けている。

#### A. 明治時代1868年-1912年

##### 1. 夏目漱石 - 慶応三年(1867) - 大正五年(1916)

日本近代文学における最大の作家と言われるのは夏目漱石である。漱石は英文学研究の目的で文部省から派遣されてロンドンで約3年間の留學生活を送った。ただし、その生活は森鷗外とは比較にならないほど貧しくて惨めなものだったようである。ロンドン留學中漱石は、自分の文学に対する考え方と、イギリスの文学に対する考え方との違いの大きさに気付き、悩みに陥った末、自分に忠実である、すなわち「自己本位」という考え方を発見した。恐らく「自己本位」という言葉は、漱石の中で日本の運命と重ねて捉えられていただろうと思われる。漱石にとって、ロンドン留學の体験は、20世紀の西洋の近代社会を体験することにほかならなかった。しかし、漱石はそれに対してあまり好感を持っていなかったようである。そのことは、後に漱石が自分の作品の中で「20世紀」という言葉を常に否定的な意味で使っていることから分かる。

漱石は留學中神経衰弱になって1903年の初めに日本に帰国することになった。留學の体験は、その漱石の作品の中で日本近代化に対して一貫した批判という形をとって繰り返し問い直された。

『ホトトギス』に『吾輩は猫である』という作品を連載したことが漱石の作家としての出発となった。「自然主義にあらずんば文学にあらず」といった自然主義の全盛期に、漱石は森鷗外とともに「反自然主義者」と呼ばれ、さらにその文学が「余裕派」ともよばれたのである。

漱石は、日本の近代化が西洋という外からの力によって行われたものであり、日本の内側から自然に生まれたものではないと述べ、安易な近代化の姿を鋭く批判している。しかしそれは結局、日本にとって避けることのできない道だったのである。

近代の問題というのは、漱石にとって単に物質文明の問題などのようなものによるだけではなく、人間の意識をも含めているのである。特に、人間のエゴイズムという問題は、漱石にとって、近代文明がもたらした「悪」、と考えられていたようである。

ロンドンから日本に戻った後、漱石は東京大学の教師として英文学を教えながら小説を書き始めるが、やがて教職をやめて1907年から朝日新聞者の専属の作家になったのである。1916年になくなるまでの約10年間に、日本人の運命や人間のエゴイズムの問題を扱った優れた作品を次々と発表していった。漱石の作品は入社第一作『虞美人草』の後、『三四郎』『それから』『門』の初期三部作、そして『彼岸過迄』『行人』『こころ』の後期三部作、自然主義風の作品『道草』などを書き、最後の長編『明暗』は未完で終わった。

## 2、森鷗外 — 文久二年（1862）— 大正十一年（1922）

森鷗外は日本の陸軍から派遣され、ドイツのベルリンへ留学し、医学の勉強をしていた。森鷗外は夏目漱石と並び日本近代文学史上最大の作家と称せられる。しかし、森鷗外は反官的な気骨を貫いた漱石と違い、長男として家族の期待と愛情を集めて育ったのである。彼は、東京大学医学部を卒業し、武士の家の伝統を守ろうとする両親の希望に従い、陸軍省に出仕して軍医になった。ドイツ留学を通して森鷗外は西洋あるいは近代そのものを知るようになり、そして日本を振り返り、日本における近代化の問題について真剣に考えている。

森鷗外の文学活動は西欧文学の翻訳や紹介に始まり、思想と感情があふれる西欧近代詩を叙情にあふれる日本語に見事に翻訳している。そしてそれらは、浪漫主義詩を生み出すきっかけとなった。一方、『舞姫』という作品は二葉亭四迷の『浮雲』とともに、近代化の問題に悩む人間像を作りあげた作品として、近代文学史のうえで大きな位置を占めるものである。森鷗外は「キタ・セクスアリス」のような私小説めいた作品をも執筆しているが、その批判的態度により自然主義文学の作家たちとは区別される。そのほか、『雁』『青年』『妄想』など、今日一般によく知られている作品は、「豊熟の時代」と呼ばれた時期に書かれたものである。

当時、恋愛に個人価値のすべてを置く道と、国家有用の徒として歩むすなわち立身出世の道と両立できなかった。森鷗外はこのことに気づき、その有り様を見事に捉え、しかも人間が本来歩むべき道を見つけるため、歴史小説の執筆を始めたのである。

鷗外は、近代的な個人主義を貫くことより、伝統的な家族愛の世界に自己の生きる道を求めて史伝へと移り、『渋江抽斎』などの傑作を残した。現実と想像との間での矛盾と苦闘とが森鷗外文学の大きな特徴である、と言えるだろう。

## B. 大正年代1912年—1926年

### 1、志賀直哉 — 明治十六年（1883年）— 昭和四十六年（1971年）

白樺派のリアリズムを代表する作家の一人が、志賀直哉である。志賀直哉は日本近代文学を代表するリアリストで「小僧の神様」にならって「小説の神様」とまでいわれた。志賀文学の特徴といえば個人の感受性を絶対的なものと断定する個性の確かさにある。士族出の有名な実業家の家庭に生まれた彼は、内村鑑三への接近と離反、足尾銅山鉱毒事件をめぐる父との衝突などを青春時代に体験している。

文学の道に進むことも父に反対されたにもかかわらず、志賀直哉は小説を書き続けていった。最初の作品である『網走まで』は明治41年に発表され、短編だが、早くも志賀直哉文学のもっとも重要な特色と余韻の多い文体を備えた作品である。そして、『城の崎にて』（1917年）という作品を「事実ありのままの小説」という風に、志賀直哉自身は呼んでいる。なお、志賀直哉は「私は創作と随筆との境界が甚だ曖昧だ」と語っているが、事実そのままを書くことが、とりも直さず志賀文学の最大の特色なのであろう。

強烈な自我の形成と獲得が志賀直哉の作品の基調をなしている。そして、事実と則した客観的で冷徹な描写が志賀直哉の文体の大きな特徴である。この二つのことにより彼は、「心境小説」といわれるスタイルを完成させた。志賀直哉の作品の多くは中短編である。「白樺派」特有の清新なイメージと率直な自我への肯定は、芥川龍之介によって「文壇の天窗」を開け放ったといわれた。大正六年、志賀直哉は長年にわたり父との和解を『和解』に描き、さらに20年ほどかけて唯一の長編小説である『暗夜行路』を完成させた。

## 2、芥川龍之介 - 明治二十五年（1892年） - 昭和二年（1927）

芥川龍之介は、新思潮派を代表する作家の一人である。辰年辰月辰日に生まれたから龍之介と命名された。早くから江戸の古典に親しんでいた芥川は『今昔物語』などに材を取って『鼻』（1916年）を書き上げ、第四次「新思潮」創刊号に発表した。これが漱石の眼にとまり激賞を受けて文壇にデビューを果たした。作家活動の最初において、芥川はほとんどの作品の着想を古典に求め、登場人物に近代人の自我を移植して現実を鮮やかに切り取って見せる。

芥川の作品の多くは歴史的短編小説であり、自然主義的私小説作品とは対照的なものであった。『羅生門』や『地獄変』、そしてキリシタン物『奉教人の死』、江戸物『戯作三昧』や『枯野抄』、『蜘蛛の糸』などインドや中国に取材した作品もある。保吉物と呼ばれる私小説を経て、自伝小説に到達した。最晩年の芥川は、プロレタリア文学の台頭に象徴される時代の不安を浴びて、現実との対決を迫られ、終末観にとらわれる。『歯車』

『河童』という作品は、死を目前にした芥川の神経が錯乱したままにかきとめられている。読者を戦慄させずにはおかない、芥川の切迫した息づかいが感じられる作品である。

### 3、谷崎潤一郎 — 明治十九年（1886年）— 昭和四十年（1965年）

耽美主義の代表は永井荷風とその荷風の絶賛によって登場した谷崎潤一郎であった。谷崎は女性の官能美を描き、美しい女の前にひざまずくことで男のよろこびが完成する物語を書きつづけた。谷崎は自然主義文学の全盛期にあつて、唯美主義・耽美主義作家として文壇にデビューして注目を集めた。谷崎文学の処女作品である『刺青』では、谷崎は極端なマゾヒズムと性的倒錯の世界を描いている。女性の魔性を賛美する谷崎文学の一つのモチーフが初期からすでにみられるものである。

『悪魔』（明治45）を発表して以来、日本における「悪魔主義」の代表作家とみなされるようになった。女性の美しさは、男性をその前にひざまずかせずにはおかないというのが、処女作以来の彼のメインテーマである。だが、荷風のような時代に対する嫌悪のかけがなく、肉体への肯定と賛美に立つて特異な耽美的世界がくり広げられているところに、谷崎文学の特色がある。

## C. 昭和年代1926—1989年

### 1、川端康成 — 明治三十二年（1899年）— 昭和四十七年（1972年）

横光利一とともに、新感覚派を代表する存在が川端康成である。川端には生命に対する根強いあこがれがある。そのことは初期の代表作『伊豆の踊り子』によく表れている。川端は、3歳のとき父と死別し、翌年に母とも死別した。祖父母のもとで暮らすことになったが、祖母も数年後に死去し、別のところに預けられていた姉も死去し、祖父と二人だけの生活を約10年間送った。彼が15歳のときに祖父も死去した。「天涯孤独」という意識は終生川端の身体にしみついていった。

また、川端は「文芸時代」に『掌の小説』としてまとめられる多くの掌編小説を書いている。様々な題材で詩のような豊かな感性を実現している。また『伊豆の踊り子』では、孤児根性でゆがんでいる「私」は踊子の清水のような清純さによって息苦しい憂鬱さから救われるという大学時代の実体験を回想した美しい叙情的作品である。孤独と処女へのあこがれは川端作品の基調になっている。『雪国』（1934年—1937年）は「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という冒頭でよく知られ、『伊豆の踊り子』とともに川端の代表作である。ほかには『千羽鶴』（1951年）『山の音』（1954年）は作者の伝統的美意識を背景に、繰り広げられる反道徳的な恋愛や死の不安を扱った戦後作品の代表作といえよう。1968年度ノーベル文学賞が川端に与えられたのも、日本的な美の世界を描き続けてきたことによるということである。

## 2、安部公房 — 大正十三年（1924）— 平成五年（1993年）

安部公房は戦後派作家の中で最も観念的で前衛的な作風をもつ作家だといえる。安部公房は、日本の近代文学の伝統にはない、超現実的で寓話的手法を用い、異色の戦後作家として注目を集めた。作品の登場人物のほとんどは名前もなければ、国籍もない。たとえ、名前があったとしても、「コモン君」や「カルマ氏」などの作品が示したように、名前はただの記号にすぎない。例えば、『壁 S・カルマ氏の犯罪』『砂の女』『棒になった男』という作品がある。

安部公房は「習慣」で動いている現実の世界で存在証明を失ってしまった世界を描く。みずから手で存在を証明することができず、またほかに存在する世界をもたない主人公は現実の世界がいかに筋道の立っていない集団であるか実感するのである。この実験的試みによって、テレビやラジオのシナリオでも数多くの賞を受けている。

## 3、大江健三郎 — 昭和十年～（1935年～）

大江健三郎は政治性や社会を含めて新たに人間の社会をとらえようと試み、22歳で『奇妙な仕事』（1957年）を発表して以来、今日までの38年間にわたって常に現代作家として最前線を走ってきた作家である。大江健三郎は戦後民主主義擁護の姿勢を自らの「持続する志」として自覚しつつ、常にアクチュアルな問題と取り組んでいる。また、創作方法においても新しい分野の探求をおこたらないできた。大江健三郎は民主主義と戦争放棄を核心とする戦後民主主義を作家的信条として持続させてきた小説家である。大江はアクチュアリティとリアリティという批評言辞を唱えた。それは文学表現が、社会的現実や歴史的現実にどのように参画し、どのような現実感をかもし出し得ているかという批評原理を意味する。

1960年代から1990年代にかけて大江健三郎は、その目次を見るだけでも自らその内容が総覧できる。「政治と性」「実存主義」「想像」「神話性」「戦後民主主義」「ヒロシマ」「沖縄」など、大江健三郎の主題を切りさばく手口は実に様々に変遷し続けている。大江は『飼育』『性的人間』『個人的な体験』『万延元年のフットボール』などの話題作を次々と発表してきた。ほかに『ヒロシマ・ノート』『沖縄ノート』などがあり、開高健とともに広島、沖縄、安保、ベトナム戦争などに強い関心を寄せている。

1994年に日本人で二人目のノーベル文学賞受賞者となった大江健三郎は、外国文学、思想に関する深い教養に加え、小説を形作る方法への強い意識を持って数々の重厚な作品を生み出してきた。大江健三郎のノーベル賞受賞演説はタイトルが「あいまいな日本の私」であり、そこには描かれている日本文学の特異性が指摘されている。今や大江健三郎は戦後文学における最も重要な作家の一人である、ということができよう。

## 結論

文学史は何よりも表現の歴史であり、時代を捉える文化的観点を提供する。時代の人々がどのように思い、考え、それを表していったかは単に暗記すべき事項ではなく、過去とつながる現代を生きる糧となるはずのものである。それによって、日本近代文学史を通して日本近代の詩文を知り、その息吹に触れる契機をつかむことができるはずである。

近代文学の創始と成長は、近代国家として出発した日本の成長過程を表すものである。近代文学は、坪内逍遙『小説神髓』と二葉亭四迷の『浮雲』の実作から始まり、明治20-30年代には「浪漫主義」の文学が花開いた。その後、自然主義に対抗した森鷗外と夏目漱石らの「余裕派」や谷崎潤一郎らの「耽美派」や志賀直哉らの「白樺派」が生まれた。さらに、現実を新たにとらえようとする芥川ら「新思潮派」が市民文学を形成しつつあった。

プロレタリア文学運動は新時代の到来として芥川ら大正知識人に受け入れられたが、その盛期は数年のうちに急速におとろえた。これに対抗するものに大正期に川端康成を主とする「新感覚派」、さらに「新興芸術」の結成が見られたが長くは続かず、戦争下、文学は逼塞状態におかれた。そして、大江健三郎を代表とする戦後世代が表れ、大衆社会の中、戦後生まれの作家が活躍するようになった。

このように、日本近代文学の最もすぐれた代表作家たちが、共通して若いころ西洋に留学し、その体験を基にして作家活動を始め、常に日本の近代化の問題を真剣に考え続けたという事実は、当時の日本が置かれていた立場とその意味を大変よく物語っている。そして、日本文学作品に表れるように日本の近代化の問題は、国家や政治レベルの問題だけではなく、作家の一人一人の生き方や心のあり方にとっても非常に大きな関わりを持つものであった。

このようにして、近代文学史を整理することにより、この一世紀日本が歩んできた道の大筋を知ることができる。また実際に、作品を鑑賞して確かに日本近代文学の代表作家たちがそれぞれ特徴を持っているように感じる。最後に、日本近代文学の中で一番大きな存在といえばほかならぬ夏目漱石だと思う。なぜなら、夏目漱石がいたことにより、文明開化以来の近代の問題が浮き彫りにされたからである。これから、自分の課題として日本近代文学の代表作家の夏目漱石の作品をより深く読んでいきたいと思う。夏目漱石が鋭くつかんだ日本の近代的な問題を考えることにより、ここ数十年政治的、経済的近代化の道を歩んできたインドネシアの問題をふりかえるにあたり、何らかの手掛かりがきっと得られるだろう。



(8)

参考文献

- 1、秋山・三好行雄（1992） 標準・三訂・日本文学史 文英堂
- 2、犬養廉・神保五彌・浅井清（1992） 詳解・日本文学史 桐原書店
- 3、吉野孝雄・宮原俊二（1996） 日本文学ガイド〔近代文学編〕 河出書房新社
- 4、ドナルド・キーン（1996） 日本文学の歴史 11 中央公論社
- 5、中村 泰行（1995） 大江健三郎文学野軌跡 新日本出版社